うれしかつた事

K・K生

今思ひ出すと大正十二年九月一日の關東大震災の時だつた。雨上りの其の日父は市役所に出勤して居て家には母と六才の私と弟で晝飯の最中に地鳴りがしてあの悲慘が起つたのだ。すわと母と一所に玄關から飛び出した通りには前の二階屋根の瓦が落ち、あちこちの家から血相を變へた人々が飛び出して來た。私は母にすがつて裏の竹籔の中へ避難した事を憶えてゐる。

少しして火災が起つた。眞黑な煙が全市を包んでメラ〳〵と火焔が立ち上つて來た。逃げ惑ふ群が通りを右往左往して海邊へと疾驅する。風呂敷包をかかへた者、行李を背にした者、皆顏色を變へて居た。火は山へ移つた。パチ〳〵と物凄い音を立てゝ紅蓮の焔が天を衝く。私は母にすがつて「父ちやんは〳〵」と泣き乍ら叫んだ。

「もうすぐ歸つて來るよ」と言つた母の顏も不安な泣き出しさうな顏だつた。「お母ちやん〳〵」泣き叫ぶ子供の聲が混雜した騷然たる物音に交つて其處此處に起つた。私は氣狂ひの樣に泣きわめいて父母を呼んで居る迷子を見て、一層悲しくなつて母に父を訴へるのだつた。

其の内に火は間近に迫つた。炎々とした黑煙は天を焦し、火焔はさながら地獄の樣だつた。父は未だ來ない。火は近い。泣き叫ぶ子供の聲がする。

私達は又避難所を海岸の原に見出して其處に移つた。單笥、長持、行李、雜多な物が亂雜に積み重なつて居る。其處へも火の粉は落ちて來た。私は又父を呼び叫んだ……。

間もなく父が歸つて來た。私は飛び付いて父にすがつた。父が歸つて來たんだ、父が。其の時の氣持、私は其の時程嬉しかつた時は無かつた。

母も安心したろう。あの震災で父を無くした者も多くあらう。母を失つた者もあらう。私はそれ等の話を聞く毎に當時の事が思ひ出されて目頭の熱くなる程の嬉しさを痛感する。（1）

鳥の聲

原田鉄雄

朝の勤めを濟せホット一息ついた私は机に寄掛つてゐた。昨日の疲れもすつかり消えて身体が爽かである。庭の青葉が春の麗暖い光と共に私の目を射る。そして耳に聞えるのは澄切つた小鳥の歌とお喋べりとのコーラスである。

机に寄掛つたまゝ耳を澄せてその聲をきく。我と我耳に恍惚とした風で鶯が聲を轉がす樣に鳴いてゐる。頰白らしい奴がひとり事を言つてゐる。雀の愛やいだ喋り合ひ、四十雀の内緒話どれも親しい聲ばかりだ。が……その中にオヤと思つて耳をかた

向ける。聞き馴れない聲が時々交つてゐる。

もう庭の一つ〳〵が朗かな輝しい朝の日光を一ぱい浴びて躍動して見える。小鳥たちは一層てんでに夢中になつて歌つたり喋べつたりしてゐる。

私はヂイットそれを聞き入つてゐる。

私は、あの小鳥たちの言葉が解る樣になりたいと思ふ心持が湧いて來る。そして身輕に庭へ飛び出して私の言葉で小鳥たちに交つて話しかけたい心持になつてくる。

掴む事の出來ないものに引つけられる樣になつて私は机から離れて小鳥たちの鳴いてゐる庭に出て見る。

私の姿が恐しい昔噺のジャイアント(巨人)が不意と、のつそり其處に現れた樣に見へたのであらう。賑かなコーラスが、ぱたりと止む。

おゝ……若し私が此處で聲を出したら、あの小さい者たちは野獸が吠えるそれの如くに驚き脅えるだらう。

私は一寸あてがはづれて再び部屋に入り机に向ふ。すこしすると今逃げて行つた小鳥たちであろう。少し離れた處ですぐ賑やかなコーラスを始める。ふと私は小鳥たちに相手にされない自分がおかしくなる。小鳥たちの聲はおらが朝を歌ひたてゝ止まない。

(1)

落葉

山本榮淳

「カサリ、カサリ」

何の音だらうか？　枝から寂しく地上に散つて行く落葉の音だ。物想ひに沈む秋の夕べに……。窓邊に佇んで庭を眺むれば、それは餘りにも寂しい秋の景色であり、あまりにも私に哀れさを訴へる秋である。限りなく澄んだあの大空も、これからはどんよりとした雪空になつてしまふのだ。大空に輝く星は變りなく光つて居るけれども、戸をたゝく風に散る木の葉は此の去りゆく秋を嘆くが如く私の耳に聞へて來る。こうして佇んでゐると何時の間にか鄕里の思ひ出が湧き上つて來る。

あゝ、もう田舍は一面落葉が散り敷いてゐるであらう。秋の學校生活、それは田舍に生れた者のみが味ふものであらふ。

日曜に紅葉した山へブドウ獲りに行つた時は樂しかつた。併し二度とそれもやつて來ない。學校から歸つて來ると皆んなで落葉拾ひに行つたり、枯れ果てた野に戰爭ごつこに行つたり、親しい友人と共に紅葉した野に私達將來に就いて考へたり……そうした事が落葉を眺めてゐる私の目に幻の樣に浮き上つて來る。舞ひ落ちる落葉。深い思ひに沈ませる落葉。落葉。善人は勿論の事、惡人迄も「カサリ〳〵」と散る落葉の音を聞く時は純潔な心の持主となる事と私は信ずる。

(1)